

# 犬も認知症に 現代「介護」事情は



預かった犬にマッサージをほどこすスタッフ＝横浜市  
中区山下町の複合施設「ワンコット」(松崎翼撮影)

## 治療中の飼い主が注意すべきこと

- 自分の感情を優先すること(あきらめずに看病をおろそかにしない)
- 病院をはじめ(動物にとってかなりの負担。セカンドオピニオンにとどめる)
- 捨てたり、愛護センターに送ったりしない
- 効果が立証されていない方法や食べ物にすぎらない



## ほっこりケア

- ぬかかいる:ぬかを炒ったあと玄米と塩を混ぜて、手ぬぐいを袋状に縫って入れる
- 温灸:背中に手ぬぐいなどをのせた上に、棒灸で温めてあげる
- こんにやく温布:こんにやくを数分ゆでて、お湯をきってタオルに包んで背中にのせる



※「はじめての猫のターミナルケア・看取り」(東書院)から

犬も年を重ねるにつれて認知症になったり、視力や聴力が衰えたりする。飼い主はどうしたらいいのか。現代のペットの「介護」。その事情をのぞいてみた。

柴犬やヨークシャテリアが気持ちよさそうに目をつぶって、寝転がっている。そばで女性スタッフがかがいがいしく犬の脚をマッサージする姿があった。

横浜市中区山下町の犬向け複合施設「WANCOT」

T(ワンコット)。この施設では屋内ドッグランやペットホテルだけでなく、24時間体制で老犬のケアを行うサービスを提供している。

老犬ケアのスペースには、11〜17歳の犬が10頭ほどいて、マッサージのほか、においで餌を探し当てる訓練なども、犬を寝かせっぱなしにしていて、ほとんど体が固まって歩けなくなってしまう危険性があるという。人間と一緒に、

介護疲れに悩む人が多い。年輩ワンちゃんを一人で見守るのは本当に難しいので、任せられる部分はプロに任せて。ワンコットのスタッフ、北島愛さん(37)はこう呼び掛ける。

ここで老犬の介護に当たるのは、獣医師や動物看護師、トレーナーなど計約10人。事前のカウンセリングに基づき、食事や排泄管理、マッサージ、ストレッチなどそれぞれに犬に応じたきめ細かいサービスを提供している。老犬だけでなく、体障害がある犬なども年齢にかかわらず預かっている。入所金10万円で、月額12万〜23万円、ほかにも医療予備費として10万〜18万円を預かる。

犬も人と同じように認知症になる。進行すると、生活リズムが狂って夜に徘徊するようになったり、トイレの概念自体が失われ、どこでも排泄するようになったりするなど飼い主の負担は増える。「夜に寝ることができず、もう限界」。ワンコットでは夜通しの世話に耐えきれなくなった飼い主から、このような相談を受けることも少なくないという。「真面目な人ほど『全部自分で世話しなきゃ』と考えてしまう。思い詰めてしまっ前に相談してほしい」と北島さん。

人もペットも介護の悩みは同じ。飼い主も一人で世話を抱え込まず、頼れる部分は他人に頼って息抜きすることも大切だろう。

## 何ができる…悩む「看取り」



獣医師の古山範子さんと愛猫あめり(古山さん提供)

ペットと人との結びつきが強まると、家族同様、かけがえない存在となる。人間の長寿化が進むとともに、猫や犬も長生きするようになり、どう看取ったらよいか悩む飼い主も。最期まで世話をすることが飼い主の責任だ。

「最期まで強く立派だったね。ずっと、かあちゃんのお自慢だよ。神奈川県茅ヶ崎市の獣医師、古山範子さん(49)は今年1月、雑種の雄猫「あめり」(9歳)を看取った。古山さんの家には保護した猫が5匹いる。あめりは他の猫の手繕いをしてあげたり、「おせっかいのお

ばちゃんみたい」だった。2年前から内臓の疾患にかり、生死をさまよった。最期の夜、妙な鳴き声が聞こえた。「もう何かをしよという段階ではなかった」。2時間ほど膝に乗せて様子を見守った。「頑張ったから」「頑張ったね。涙は出なかった。古山さんは5月に出版された「はじめての猫のター

ミナルケア・看取り」の監修に携わった。ペットの看取りは難しい。医療を尽くした後、果たして飼い主がしてやれることはあるだろうか。「薬の副作用が強くなって『つらい時間』をつくってしまふこともある。穏やかな時間を過ごしてもらおう」と古山さん。

自分の感情(悲しみ)を優先してしまふことがある。飼い主の心配があまりに出してしまうと、犬や猫が「病氣」と感じ、不安がらせしてしまう。普段通り接することが求められる。死んだときの「ペットロス」も課題だ。古山さんは「ペットロスは当然。誰でも愛する存在を失ったら同じ。悲しむときは悲しみ、気持ちを共有できる人がいればよい」と話す。

「日にち薬」という言葉がある。時間がたてば心は軽くなっていく。供養して気持ちの整理をつけ、再び前を向けば、天国のペットも喜ぶはずだ。